

★ キ ヲ ミ コ

氏名（本籍） 八 木 文 子（東京都）  
 学位の種類 博 士（美術）  
 学位記番号 論 博 美 第 6 号  
 学位授与年月日 平成10年12月10日  
 学位論文等題目 <論文>「人-問いかける存在-」  
 <作品>「父と家族のためのエッチングⅠ」

論文審査委員

（主査）	東京芸術大学	教授	（美術研究科）	中 林 忠 良
（論文第1副査）	”	”	（ ” ）	武 藤 三千夫
（作文第1副査）	”	”	（ ” ）	野 田 哲 也
（副査）	”	助教授	（ ” ）	保 科 豊 巳
（ ” ）	多摩美術大学	客員教授		深 沢 幸 雄
（ ” ）	慶応義塾大学文学部	助教授		大 石 昌 史

（論文内容の要旨）

論文題目 : 「人-問いかける存在-」

論文提出者 : 八 木 文 子

論文の構成 :

- 序
- 第一章 自己経験の境界
  - § 1 目差しの交差と分裂
  - § 2 現実感情からの離脱
  - § 3 準-記号表現
- 第二章 実践と展開
  - § 1 普遍化
  - § 2 単純化
  - § 3 パラドックス
- 第三章 表現性
  - § 1 再帰性

## § 2 円環性

## § 3 本質の再興

### 結 語

論文の概要 :

先ず、本論の意図と目的を略述する。そこでは、作品に内包される基本性格「情感的質」を指摘し、それを、作家としての藝術家、受容者（＝鑑賞者）、そして、作品媒体のそれぞれの視点から主題的に追跡することによって、藝術表現における認識作用の主観性と認識内容の客観性との架橋を試みる。そのさい、作品媒体の記号性に注目することによって、絵画における記号論的機能の諸作用を明らかにし、さらに、その構造と機能は表現的普遍性を有する一種のアイコンとしての「準-記号表現 quasi-semiotic representation」であると規定する。これと並んで、藝術家の企図と表現がこうした思考に至るその結果を構造的に考察、論証することによって、絵画制作における螺旋的發展構造に新しい記号機能と解釈項を取り入れ、さらに豊穡な絵画の今後の可能性を明らかにしようとするものである。

次に、各章の概略を述べる。第一章では、作家としての藝術家の制作企図と受容者との両視点に、さらに同時に、表象化された現象的事実性に相対することによって、それらがそれぞれアンティノミーとして対立するときの記号的性質に視座を据えながら、考察を進める。これは、作品のもつ「情感的質」の特異性を記号論的観念から論証することである。この章では最後に、「準-記号表現」の概念を導入する。

さらに第二章では、この「準-記号表現」に辿り着くまでの作家としての論者の思考を、その制作における実践的展開から考察する。そこでは、普遍的な「感覚性の記号」の形象化という概念が制作を一定の方向へと向かわせるとする。そしてそれが、新たな存在論 *Ontologie*への移行点となり、それは「意識」の記号論的、方法論的な見直しを迫り、論者自身の問いをさらに先へと押し進める。

最後の第三章では、前章の課題としての「創造」過程での回答として、「構成 *Konstitution*」における意識概念の再確立、「超越論的主観」の概念規定に到達し、未完結的記号の領域に踏み入る。そして制作とは、宿命的構造として、常に繰り返される「円環」的反省の努力であるので、それは、形象による構成を使命とする藝術家の唯一の内的弁証法として「問いかけ」の場であることを論証する。

以上で、簡潔に各章の論述の概略を記したが、これに続く以下の説明は、これをさらにやや詳細に敷衍するものである。

#### 第一章 自己経験の境界

ここでは先ず、藝術家自身の主観的な精神性の深層内面から触発された意識の存在を「第一次的イメージ」とし、絵画作品に現象する幻影イメージを不可避免的に感受する受容者のイメージを「第二次的イメージ」と規定する。この両イメージは、たしかにパラドクシカルな関係にあるので、作品が作家の意図するイメージから隔離されるという可能性が充分にある。このことは、作品表現において用いられる媒体（マテリアル）が実在層に属し、しかも同時にある種の「情感的質」とその「幻影」もそこに付着していることに基因する。つまり、作家のイメージが他者のそ

れと関わる関係性の狭間に「作品」が媒介項として自律的に存在するのである。そこで、作品存在における作家と受容者との視点の交差と分裂という不可避的事実がここでの論述の出発点となる。ここで問題となるのは、作品に現象する「情感的質」を作家自身の「第一次的イメージ」によって媒介された普遍的形式として、いかに提示させるかということである。それは、エドモンド・フッサールによる「現象学 Phänomenologie」の意味で一作家としての藝術家の意識の事象自体 zur Sache selbstに即して明証的なevident—一種独特な観念の表現を作品に与えることによって解決されると言えるが、記号論的に言い表せば、対象を指示するいかなる意味作用よりも深いところに根ざす表現であると言える。

このような理論的基盤を獲得するためには、作品媒体の本質構造と美的・藝術的機能が、「記号論」で説かれる事実を指示する記号の機能と、類比的に明らかにされることが必要になる。さらにここでは、それが、それら構造と機能が感情の分節的表現である一種のアイコンとしての「準—記号表現 quasi-semiotic representation」であるという規定を与える。この規定は、「感情」と「表現」の相互関係を確立させ、そして、さらに豊穡な絵画の可能性を明らかにしようとするものである。

そこで最初に、記号についての主要概念が挙げられるが、そのとき「記号」と「準—記号表現」の両者共通に、記号機能が備わり、ある種の論理性に照応する「論理」と「理性」について検討される。このとき、「論弁的論理」における記号と、「非論弁的論理」における記号との相違もしくは類似が指摘され、「非論弁的記号体系」は「論弁的記号体系」に依拠はするが、すべてを言語化しえないものの存在は、絵画におけるような「情感的質」の特異性に帰せられる。

ところで、絵画の表現根拠としてのアイコンの「感覚性の記号」である「準—記号表現」は、記号機能として、論弁的に識別され、認識されることはない。絵画は、記号機能を有しながらも、真の意味で「記号」とはなりえないので、ここで螺旋的発展の弁証法があらためて注目される。このような現象は、絵画にばかりではなくて、あらゆる媒体による藝術表現の統一という根源的な問題にも伏在すると言える。次章では、このような問題を制作における実際の領域で検証する。

## 第二章 実践と展開

ここでは、作家として自覚する私自身が、作品を造形的に構成するさいに生ずる、「準—記号表現」への志向がもたらす現象の問題と制作上の実践的展開とについて考察する。それは、新たな存在論 *Ontologie* へ向けての私自身の問いを遂行させるためのものである。

表現を具体的に実現する「準—記号表現」に達するためには、その内的生命の根底に根差す論理が必要とされ、しかもこの論理は、表現のためのある種の観念であることを論述する。そして、表現のための論理の適切さと必然性は、作家の企図する「第一次的イメージ」を「準—記号表現」として形象化させ、普遍的な表現を志向的に構成する。

ここで先ず注目されるものが、「情感的質」である。それが注目するのは、自律的存在としての作品を認めさせ、U. エーコの『記号論』<sup>5</sup>で提示された「仕組まれた刺激」に作家としての私自身の感情の普遍的本質を相関させ、形象化する試みとなるからである。これは、たんなる素材そのものを超出した「感覚性の記号」への移行であった。この過程で求められるのは、感情に照応する造形的象徴のための表現要素として、認識可能なものに還元されうるものを選択するこ

と、しかも、凝縮された指示内容の形象を目差すことである。ここでは、「他者性」と「自己完結性」の両形式の統一が、画面の上で「排除」、「構成」の操作を通じて単純化されることになる。このような「単純化」の過程では、対象の模倣的再現や状況の説明要素が排除され、もしくは、感情の抽象化を踏まえて、一つの形像が消失し、その結果シルエットとして残存する。「単純化」を遂行するさい、自己と自己投影の抽象化としての相関的構図の造形化によって、その調和と両立が目差されたが、画面の上での具体的な自己の形体の消失という現象は一層進展した問題を提起することになった。つまりこの現象の背後には、「自己についての意識 *Bewußtsein von sich selbst*」といった意識の主観性が存在することであった。つまり、有機体＝身体としての自己が、意識の主観性へと遡行し、「第二の自己」に到達する。問題になるのは、この「第二の自己」、「心的なもの」が「不在」としてしか表現されなかった点である。このような隠蔽された主観性、あるいは、精神という背景の隠されたままの表現は真であるかという問いは、非形式としてのその自発性において、形式を備えた形象として表面化するというある種の矛盾を孕む。結局、「単純化」の形式は、感情における精神のロゴスを究極的、回帰的に再発見することになる。そこには、「真実である幻影」、「客観化された自発性」といった主題が扱われた。一般に我々は、「精神」と「形式」、さらにこれらと並び、照応する「情感的質」の間の矛盾構造を「パラドックス *Paradox*」と称するが、ここでは、「情感的質」が提示する「幻影」は、伝統的な「自画像」の自己投影のパラドックスではなくて、G.W.F.ヘーゲルによる弁証法における意味で止揚（＝揚棄）*Aufheben*され、解決されるべきものとする。

自己矛盾的であるということは、作家としての画家の「第一次的イメージ」から発して、その自己実現を可能にするものとしての作品が、同時に自己存在の不可能性を感じ取るゆえに、作家としての私自身の「存在」へと振り向くようにと求めることでもある。ここでは、精神と有機体＝主観と客観との「円環構造」の問題として、自己の存在に目くばせするための「存在論」に関わると言えよう。作品が命題へと向かうときの表現方法、そしてそれからの逸脱へと至る過程では、作家は、取り囲まれた現実の世界からの明証的な意識に基づく離脱の試みを繰り返さなければならないということである。このような問題意識が、私という自己の表現の制作プロセスの根底に存在するがゆえにこそ、その形像が一定の方向へ変化したと言える。

しかし、「準一記号表現」における主観はその内在の意味での主観的感情の乗り越えが必要なので、超越論的主観性の視点の下で、作家と作品媒体という「両義性」の、さらには作家としての藝術家と受容者という「二重性」の構造の、反省的な見直しが迫られ、それが次の論点となる。このような「意識」の絶えざる転換が、新たな存在論にむけての私自身の問いを遂行させる。「準一記号表現」へと促す動機は「対立と同時に連帯もする反省の試み」として、作家としての私の知覚世界となる。

### 第三章 表現性

ここでの論述の目的は、前章で指摘された問いに対する回答として、「主観」と「客観」、そして「作品媒体」との間で常に遊動する混沌を秩序づける絵画の品位 *dignity*を再び確立し、その意図を露わにするために、新たな存在論的地平で、自己表現としての探究を遂行することである。そのさい、フッサールによる「現象学」の意味で、作家の意識の「事象自体 *Sachen selbst*」

に即して考察する。このような考察を必然化するのには、現象学的な未完結性と創造行為における未完結的記号との論理的見解に反省的に踏み入れようとするがゆえである。同時にそれは、表象的形像に向けての自己意識に対する反省でもある。制作行為とは、絶えず発見される反省的真理に依拠して生ずる新たな形像であるという意味での、「円環性」を備えた問いかけの連続的行為であり、また、産出された形像に自己を定位し、自己の意味を見い出す「自己がいかなる存在であるか Was für ein Seiendes ist er selbst?」を認識することでもある。このような根源的問いは、世界に対して生き、立ち向かうものとして定立する「自己存在」の在り方の真理性への問いである。

さて、「創造」とは、制作という過程での構成における再確立であり、企図としての論理の再構成であるとしたが、ここで「構成 Konstitution」についての解釈が注目される。主観による根源的な構成作業へと還元することが「創造」であるとするならば、ここで意味する「構成」とは、たんに主観が「対象を構成する」のではなくて、フッサールの意味で、対象が「自己を構成する sich konstituieren」という意識概念である。この意味で「創造」とは、主観としての自己存在と実在的作品存在〈事実性〉との相関関係を規定する反省行為であると言える。そして、論理的再構成が主観によって還元されるがゆえにこそ、行為は常に反省的である。

さらに、主観による反省的還元について、それが明証的に主観的認識を超出し、再構成による普遍的形象となるためには、「超越論的主観」の概念的規定を必要とする。フッサールはこれについて、認識者が自己自身ならびに自己の認識する生へ自己省察を加えようとする動機であるとし、さらに、自己認識へ向けての自己省察とは、主観的意識概念からの超出ではなくて、認識構成に問いかける動機であるとする。超越論的主観とは、自己自身のたんなる客観視あるいは他者意識ではない。このような認識は成立しえないものであって、すべての認識は客観的認識を媒介して基礎づけられた主観的形象であるとされるが、このような現象学における未完結性と未完の記号たる創造物との間には、ある種の類似性が存在すると言えよう。哲学的思考の「真理の実現」が合理性や予在の真理の把握ではなく、省察する自己としての真理の思考の努力であるとするならば、作品における真理の実現もまた同じことであろう。「準-記号表現」の普遍性に対して、作家の制作の内的弁証法が存在すると言うことである。この内的弁証法の意味する一種の「円環性」は、一見パラドクシカルな現象を垣間見せるが、創造の起原の情動においては切り離しえず、「螺旋」構造に添って展開する。

「円環」が「螺旋」へと発展する究極の真理のトポスは、主・客(=観念・実在)の対立を越えた、両者を結びつける反省的構成において可能になりうる。創造物は、ある種の情感的記号となり、これによって自己を他者の経験として捉え直すことによって、創造的情動となる円環性を有した「問いかける存在」そのものである。確かに、ある普遍性として規定した「準-記号表現」においては、その真理性ゆえに、問いかける「円環」が囲い込む空虚 voidのうちに到達点が欠如する。しかし、その問いかけへの意味付けは無益であり、意味付けによって同一性を獲得できるわけではない。そしてまた、作品に問いかけるものにとっては、それは、真理の欠如態ではない。

これら問いかけの相互貫入の関係、そして、原初の問い自体への問いこそは、私自身に求められた必然的理解の結果である。対象が「自己を構成する」ための常に新たに開示される欠如態を

認めること、そして、それを補填する表現付与として「準一記号表現」の記号的確定は必要ではないということである。今という「現在」の論理的観念と思想の共存、またそれらの時間の内に開かれる還元への瞬間において、作家としての藝術家とその作品とは、両者が問い掛け合う存在自体であり、創造における宿命的構造である。

注) ウンベルト・エーコ『記号論』Ⅰ、Ⅱ、各1980、池上嘉彦訳、岩波現代選書43 (Umbert Eco, *A THEORY OF SEMIOTICS*, Indiana University Press, 1976)